



Title	彙報
Author(s)	
Citation	懷徳. 1970, 41, p. 110-114
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90489
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

彙報

(懷德堂記念會)

○昭和四十四年十月十一日(土) 東區北濱三丁目本會(適塾内)に於て、午後一時半より記念祭典執行、終つて大阪大學教授木村英一氏の「伊藤仁齋先生の儒學」と題する講演があつた。

○秋季講座 十月十三日(月)より十八日(土)まで、本會及び大阪大學文學部主催、朝日新聞社後援で、大阪大學醫學部四階講堂に於て、毎日午後六時半より八時まで、第三十八回懷德堂講座開講、聴講者延二百四十人。

演題と講師

- 中國古代の官僚制 關西大學 大庭脩先生
- 西洋の藝術 大阪大學 山川鴻三先生
- 大阪と朝鮮 追手門大學 岡崎精郎先生
- 企業に於ける人間理解 大阪大學 太城藤吉先生
- インドからギリシャへ 追手門大學 村主恵快先生

懷德堂公開座談會

○十一月三日 正田評議員文化勳章受章、吉川事業運営委員文化功勞者として表彰さる。

○昭和四十五年三月三十一日 評議員兼事業運営委員木村英一氏大阪大學教授を定年退官さる。

○四月一日 釜洞醇太郎氏(阪大總長)理事就任、山田信夫氏(阪大文學部長)理事兼事業運営委員就任、森三樹三郎氏(阪大教授)事業運営委員就任。

○理事長上野精一氏 四月十九日心不全のため逝去。大正十年より約五十年間理事として、懷德堂のため非常に盡力された。寢に哀悼に堪えない、ここに謹んで弔意を表する。

○五月三日 北澤理事勳一等に叙せらる。

○春季講座 五月十八日(月)より二十三日(土)まで、本會及び大阪大學文學部主催、朝日新聞社後援で、大阪大學松下會館四階講堂に於て、毎日午後六時半より八時まで、第四十回懷德堂講座開講聴講者延二百十人。

演題と講師

- 潛夫論について 愛知教大 日原利國先生
- 萬葉歌と風土 帝塚山大 犬養 孝先生
- 山片蟠桃と多田義俊 阪大大學院 宮内徳雄先生
- 六朝の政治と文學 大阪大學 森三樹三郎先生
- 子路と顔淵 追手門大 木村英一先生
- 高駢の山亭夏日について 京都産大 都留春雄先生

(堂友會記事)

四十四年十月十日 懷德四十號發行
四十四年十月十一日 記念會恒祭に會員多數參列

四十四年十月二十七日 秋季見學會

立命館大學教授笠井昌昭先生の指導によつて山科隨心院、勸修寺、醍醐三寶院等の仙庭幽園、靈寶等を見學した。會員三五名。

四十四年十一月、維持會員澤美枝女史より特志により五千圓の寄附を受く

四十四年十一月より隔月委員會を開催して會務を打ち合せた。

四十五年一月十七日 會員川尻進君死去

同君は委員として生前會務のために盡力されたが尙春秋の富める身を以て他界されたことは残念とする所である。謹んで哀悼の意を表す。

四十五年四月十九日 堂友會名譽會員上野精一君死去

同氏は多年懷德堂記念會理事長として、記念會の發展に努力されたのであったが、病氣により他界されたのである。謹んで哀悼の意を表す。

四十二年十月十八日 會員山本富三郎君。

四十四年七月 會員鈴木梅次郎君が他界された。兩君は多年に亘り聽講生であつたが死去されたことは残念である。哀悼の意を表す。

四十五年五月二十四日 春季見學會

京都林泉協會副理事長佐々木利三先生の指導にて大徳寺塔頭なる龍源院、瑞峯院、眞珠庵などの林泉幽庭を觀賞した。相當の感銘を會員に與えた、参加者三十五名。

四十五年七月十七日～十九日 夏季見學會

岡山大學教授齋藤孝先生の指導で香川縣琴平町金刀比羅宮、善通寺市の善通寺、白峰寺などの史蹟文化財の見學會を催した、参加者四十五名。

四十五年七月二十日、會員中川幸三君より四千圓也寄附を得た。厚志を感謝す。

(夏季見學會記事)

七月十七日夜加藤汽船ぐれいす丸で辨天埠頭を出港した。見學會員四十五名は漸く明けそめた高松港に四時五十分頃着いた。驛頭で今回の講師岡山大學教授齋藤孝先生と落ち合つて、七時過琴電で今日の見學目的地の琴平についた。先ず北苑の高灯籠を見て、徒歩金刀比羅宮圖書館につく、ここでは早朝に拘らず同館囑託松原秀明氏の出迎えを拜受して、少憩、同宮に係ある貴重な文書、歴史ある日帳などを拜觀した。それより閑寂に朝氣を感じる神苑を登つて寶物館にいたり館内の文化財をくまなく拜觀して、金刀比羅宮社務所に参進、琴院宮司に面接し見學の趣旨を通じ、今回の見學に對する種々なる御配慮を謹謝した。後、重文の表書院、奥書院を見る。この建造物は元金光院の宮殿表書院である。間口二十一・七米、奥行十六・九米、一重入母屋造り檜皮葺の建物で、上段の間に書院、床、違棚や帳臺襖があり、二の間が付き二列六間造りで、各室の壁襖には、重文の圓山應舉の繪をはり、正面軒に唐破風があり入側や落縁が付いている。江戸前期の書院建築である。奥書院は一重入母屋造り本瓦葺で三方銅板葺庇を付けている。上段の間二

の間廣間茶室などがあり、床、障棚もつき壁襖に伊原若沖、岸岱の美しい繪をはった江戸中期の建物である。そして奥書院より眺望する讃岐富士など景觀は絶佳である。そして木造十一面觀音立像がある。元觀音堂の本尊で檜材一木造り、高さ一四四

・八米で彩色像、端正で温和なお顔、均衡のよくとれた體軀の藤原時代の作品である。かく書院の拜觀をすまして長曾我部之親が天正年間大麻山に布陣の時神威を懼れることがあつて一字の樓門を建て、これを獻じ様としたが事が急であつたので柱を逆に用いたので逆木門という門を、進んで本宮に賽した。本宮で世界平和、國家安泰、參加者の健康と旅行の平安を祈願して御神樂を奉獻した。繪馬堂、旭社、大門及金刀比羅宮とは特殊の關係のある五人百性の賣店を経て學藝館に我國初期の洋畫家の高橋由一畫伯の遺作二十六點を一入感深く觀賞した。後、虎屋にて小休止中食した。所がここで意外の書蹟に接したのであつた。ことに堂友會員としては拾いものであつた。それは三宅春樓先生の眞筆なる赤壁賦の壁かけであつたので、これを一撮して公表してはと考へた。その夜宿舎での話では繪馬堂に會員の先祖が獻額した馬の繪馬額があつたとのことである。これ等から察するに琴平と堂とは何か深き奇縁があるのではないかと感ぜられ關係の淺からざるものがある様に思われた。

かくて石庵先生とは深き因縁のある木村家の墓所を見、ついで日柳燕石の遺宅吞象樓などの遺蹟を見經て、弘法大師誕生に縁ある誕生院普通寺に參拜した。ここでは胎門くぐりをし、大谷僧正の法話をきき殊に拜觀を許された國寶の一字一佛法華經

序品と傳來の金銅錫杖などの文化財を拜觀し他の靈寶什物等を清觀したことである。

一字一佛法華經序品は傳によれば經文は大師の母君の筆であつて佛像は大師の作であるというが平安中期初秋の頃の筆である。又錫杖は大師が惠果阿闍梨から授けられたものと傳へ、中央の阿彌陀三尊その外側に四天王を鑄出し、二股がそれをかこみ三環づつが付いている。空輪が二段に屈曲し、六環が二重の子持であることから中國宋代のものであることが知られる。普通寺境内の大桶や三帝廟墓とを見、かつ三重塔なども見て、車を五色臺の簡易保健センターに馳らせた。可成高所を走る中で下界の眺望は非常に素適に感じた、六時過終日の疲れをここ保健センターに投じて醫することにした。

一字一佛法華經序品は、縦二九・四種長さ二一・二米の一巻で縱横とも二・五種内外の間隔で黒界線を引きその一區畫内に一字ずつ一行に一〇字を一行おきに書いて行間には一字ごとに日相の中に蓮臺に坐した佛像を描たものである。

十九日 一泊一浴して疲勞を一擲した會員は生氣を取り戻して九時出發元氣に本日の行動を開始した、先づ記念撮影してから徒歩で白峰寺に向つた。

路傍に笠塔婆を見てから、源頼朝の崇徳上皇菩提のために建てたと傳えられる十三重供養塔を見た。これは頼朝塚ともいわれて、弘安元年(左)、元亨四年(右)、在銘がある。次に崇徳天皇御陵前なる頓證寺殿を拜觀した。殿前で白峰寺三好僧正の法話をきき、清澄の山氣につつまれた境内で崇徳天皇の哀史をき

くことは一入肌身にしみこむを感じた。この寺は雨月物語の白峰の下にもあって西行法師の歌碑もあり、又上皇ゆかりの玉章の木も今は風倒して根元のみを残しあるという、ついで天皇陵に參陵し冥福を祈請した。陵側に石造美術品として頓證寺灯籠も文永四年の在銘のもので他に鬼面の灯籠もあった。それでこの寺の縁起としては弘法智證兩大師の開基である。

弘法大師は弘仁六年當山に登り、峰に寶珠を埋めて阿伽井を掘られた。寶珠を埋められた所が瀧つぽとなり、三方に落水して増減したことがない、貞觀二年、智證大師はこの山上の瑞光を見られて山に登ると白髮の老翁が現はれて「我はこの山擁護の靈神、和尚は法幢輪弘通の聖者である。ここは七佛法輪を轉じて慈尊入定の靈地であると告げられた」智證大師は老翁とともに海上に瑞光を放って居る流水を引き上げて山に運び、千手觀世音の尊像を彫み安置された。現在のご本尊である、因に老翁は當山の鎮守相模坊大權現である。第七十五代崇徳天皇は保元の亂に因り當讃岐國に御遷幸の後貞寛二年（一一六四）崩御遊され御遺詔によって同年九月十八日當山稚兒ヶ嶽に茶毘し奉りて御祭りしたのである。後三年後に仁安元年神無月の頃西行法師は御陵前に詣で一夜中法施して御靈を慰め奉りしことなどを思んだ。このような淨室に小憩中食したのであった。

斯様にして時も來たので寺を辭し、五色臺展望臺に登って小觀、瀬戸内の風光を心行くまで満喫したのであった。後天平の昔を偲ぶたはずまいの國分寺に參詣した。本堂は鎌倉時代のもので五間に五間の一重入母屋造りの建物であり、形式やら手

法などに時代の特徴をよく示して居る、銅鐘（重文）は總高一五一・五樞、口徑八九・七樞、口邊の厚さ八・三樞で香川縣下最古の奈良時代末又は平安初期のものである。音色は溫和で美しく低い餘韻をもつとのこと、そして御本尊の（重文）丈六千手觀音はその尊容を拜することが出来なかったが、櫨の一木造りで、高さ五・二四米の丈六の巨像で藤原後期の作である、頭上には十一面をいただいた四十二手の像で、御顔は溫和で髮、眉、目、口ひげなどは墨でかき分厚い唇には朱を塗り、全身に彩色を施し、裳に色美しい牡丹の繪模様などが描かれて居る。これは少し連絡が十分でなかったので残念ながら割愛したことであるが會員諸氏にも申し譯けなかった。しかし天平時代の遺構に親しく接したことは一部の慰めであるとも思う。それから栗林公園に三伏の暑を避けて、園内を散策したのであった。小亭に憩ったが暑さは退散しなかったがこれで今次の見學會の豫定の全部を終ったのであった。かくて五時二十分關汽くれない丸で歸阪した。この夏季見學會も會員諸氏の健康も他の障害もなく遂行し得たことは周到なる準備と運営に盡力された山口、富岡兩委員の賜物として感謝する所であった。

同時に金刀比羅宮の御神徳の偉大なる靈感と、弘法大師の萬民弘通の冥福とに負うところあるものと深く感謝する次第である。

然して今次の旅行に當りてすべての便宜と支援とを與えてくれた金刀比羅宮宮司琴陵光重氏及同社關係の神職諸氏、普通寺管長大僧生蓮生善隆氏及同寺庶務部長大谷象堂僧正の御厚志、

及び白峰寺三好僧正、又香川縣文化財委員三谷氏、善通寺市史編纂室長奥村氏及金刀比羅宮圖書館松原秀明氏又虎や支配人三井義重氏などの御懇情に對して謹んで感謝の悃誠を表します。尙末筆ながら堂友會委員諸氏にも厚く御禮申し上げます。

酒井

會員動靜

死亡

山本富三郎 四十二年十月十八日

鈴木梅次郎 四十四年七月

川尻進 四十五年一月十七日

退會

豊岡憲章

入會

藤枝春月

桐本忠雄

阿部萬壽子

矢野義之

山本さと

井上博造

田久呂彌生